崇光天皇、光明天皇陵

伏見と日本の天皇との関係は、国内と海外の観光客、双方から見過ごされてきたが、その歴史的な重要性は、多くの天皇陵とその地域に存在する関連のある遺跡によって例証されている。

14世紀には、2つの家系が天皇の称号をめぐる争った。それはすべて、後醍醐天皇(1288-1339)が幕府から離れ政治力を強化し始めたときに始まった。武将の足利尊氏(1305-1358)は1336年に反撃し、京都を征服した。尊氏は後醍醐天皇に代わり光明天皇(1322-1380)を天皇に就かせた。天皇家では武士の味方であった光明天皇が、天皇へ任命されたことで、朝廷は足利の支援を得た北朝と後醍醐天皇の南朝に分断された。尊氏は1338年、北朝の光明天皇により将軍に任命され、南朝の後醍醐天皇は身を守るため、比叡山の頂上にある延暦寺に逃げ込んだ。南朝が足利義満(1358-1408)の統治下で再興を願うのを断念するまで天皇家の分派は56年間続いた。彼の統治は1336年から1348年まで続いた。崇光天皇(1334-1398)は、北朝の第3代天皇で、1348年から1351年まで日本を治めた。

光明天皇と崇光天皇陵は、JR桃山駅と宇治川にはさまれた伏見の静かな郊外にある松林の中に佇む。かつては京都の生け花の家元で珍重されていた花の栽培で有名な地域である。